

宮本百合子『伸子』

— 主体における切斷と重層について —

遠藤伸治

はじめに—文学テクストの多義性・個別性と一義的理念
「伸子」の読みについて考える時、千田洋幸による「伸子」およびフェミニズム批評に対する批判と、それに対する飯田祐子、水田宗子、高良留美子、北田幸恵、岩淵宏子による反論は興味深い。

千田洋幸は、「伸子」という主体のイメージは、あらゆる多義性・曖昧性・渾沌を統御し、人間に全一的なアイデンティティをもたらし超越的な力の象徴—すなわち男根フツキネと、もののみごとに重なり、「伸子は、へ真実へ真理」をみずから体現し、「合理性へ精神」という絶対的概念を希求することによって全一的な自己主体を獲得する、男根フツキネロゴス中心主義の権化ともいうべき存在」だとする。そして、「伸子」が「自然主義、あるいは白樺派の作家たちが生産しつづけたヘリアリズム」小説の系列につらなる、男根的なテクストであるにもかかわらず、「女性解放の小説として肯定的に評価され

てきたのは、ひとえに、これまでの「伸子」論の多くが、物語を生成する語りの構造や文体の問題といった、テクストの言葉そのものにかかわる分析を回避しつづけ、物語内容の表層部分のみをフェミニズムのイデオロギーと野合させるという反動ぶりを演じてきたからにすぎない」と批判した。

先に千田の論を見ると、この論自体が、「テクストの言葉そのものにかかわる分析」は少なく、伸子の志向する「全一的な自己主体」が実際に「獲得」されたかどうか、それが「あらゆる多義性・曖昧性・渾沌を統御」しているのかどうかを確かめないままに、伸子の「統一的主体」志向だけに基づいてテクストの「多義性・曖昧性・渾沌」を排除し、伸子が「統一的主体」だという批判に終始することに気づく。まずテクストの多義性を前提として、それを直線的に狭めてしまふ「統一的主体」という理念を批判しながら、結論として、そのテクスト自体の直線的狭さを批判するという

千田の論理展開には、重大な論理の転倒がある。文学テクストの特質は、一般的理念に還元されない多義性と個別性にある。重要なのは、文学テクストの多義性の側に立つて、思想的・社会的な理念の一義性を相対化することであり、理念の側から文学テクストを批判することではないはずだ。理念的読みから「伸子」というテクストを開放し、その多義性を読み取ることは、千田にこそ必要なのではないのか。

一方、これに対する反論は、「伸子という主体」が千田の言うような「確固とした統一的主体」かどうかという点で、二つに分けることができる。

飯田祐子は「一見確固として成立して見える主体は、よく見れば不均一不統一で混乱して^{注二}いるとする。水田宗子は「とりたてて悪いところのない夫(佃)を離婚しようとする小説なのだから、伸子を統一ある人物とはいえないだろう^{注三}」とし、高良留美子は「伸子」は、父権制家族のなかで統一的主体ではありえない(へ姫)が、統一的主体を前提とするかのようなロゴスの・男性的な言葉を使うという、大きな矛盾と分裂をかかえたテクスト^{注四}」だとする。

もう一つは、今日のフェミニズムにも通じる「伸子という主体」の歴史的意義を重視する立場から、北田幸恵は「現実の女性差別が残存したまま、脱構築によって抵抗の拠点としての主体の立場そのものを崩すことは問題^{注五}」と反論し、岩淵宏子も北田の論を支持し

た。^{注六}しかし、これ以前に、岩淵宏子も北田幸恵も、テクストの言葉そのものの分析を通して(母)や(へ姫)との葛藤の中で揺れ動く「伸子という主体」を分析している。^{注七}つまり、北田も岩淵も、千田が批判しているように「伸子という主体」の重層性やテクストの多義性を認めないわけではなく、論理的にはそれがあるとしても、差別という現実に対する政治的判断に基づいて一つの読みを選択し、「伸子という主体」を支持すると主張していると評価することができる。これは、ロゴス中心主義ではない、明確なフェミニズムの立場だと言える。ただし、論理的には、主体を解体するから「脱構築派」を認めないとするのは、伸子が「確固とした統一的主体」であって、フェミニズム批評が、テクストをフェミニズムの理念に還元し、テクストの多義性を見ないという千田の批判に論拠を与える結果につながってしまうとも言え、多くの男根的なテクストに対し、その批評性が有効に働いてきたフェミニズム批評もまた、フェミニズムの理念を立ち上げる「伸子」のようなテクストに対しては、その多義性を抑圧する側に機能するという研究上の問題に直面することになる。

しかし、テクストの多義性を読むことは、飯田祐子が試みているような形で、(書く主体)を一般的な次元に解体することではない。主体が形成される場について、ジェンダーや所属階層の差異といった社会的諸力がどのように主体を形成するのかを考えることである。

以下、「伸子という主体」の形成に關し、フェミニズム批評が立ち入ってこなかった問題点について考えてみたい。

一、〈父の娘〉、父性的・男性的なものへの期待

「伸子」という作品は「家」を破る女^性として読まれてきた歴史があり、また、北田幸恵は、「それまでの母親の沈黙・象徴的な意味での〈母殺し〉を前提としていたヒロインが、父親・男性的なものと訣別することで母親との結合が可能になったが、しかし自らが母となったり、母を反復することは拒否するヒロインへと大きく変貌した」というマリアンヌ・ハーシュ「母と娘の物語」の指摘にそつて、「伸子」を読みなおそうとしている。しかし、「伸子」の中に〈家〉や「父親・男性的なもの」からの訣別が表明されているのだろうか。

「伸子」は、ニューヨークのホテルの一室で、「仕事に没頭している〈父〉を「子供のうちから」の習慣によつてただおとなしく眺めていた伸子が、やがて、「品のよい」「くつろいだなりにも似合わず」、「仕事」を精力的にこなして行く〈父〉の姿を見ているうちに、「力強い確乎とした、同時に精力的な亢奮に似たもの」を感じると、という場面から始まる。

ここに見られるのは、ゆとりを持って「仕事」をこなす有能さと、「仕事」の「亢奮」とを〈父〉の中に発見し、〈父〉に共感して

行く成長した〈娘〉の姿ではないのか。「父について紐育へ来たのも、彼女は自分が欲する通りに生きて見る機会を得たいのが主な動機であった。佐々の家で伸子は長女であった。勝気な母の多計代のひそかな大望の偶像にされそうところがあつたり、中流家庭の娘として、伸子が望むだけどしどし人生に突入することを許さない掣肘があつた」（二章七）とあるように、まず伸子が行うのは、〈父〉の庇護の下に〈母〉から離れ、「人生に突入する」ことであり、「父親・男性的なもの」からの訣別ではない。

伸子にとつての〈父〉は、抑圧的な嚴父ではなく、頼りになる庇護者であり、これは、冒頭から佃との結婚―離婚に至るまでほとんど変わらない。伸子は、佃との結婚を考える際に、自立できるほどの仕事をしていなくてもかわらず、「彼を稼ぎ手としなければならぬ必要はなかった」（二章三）と考え、結婚後も、帰国の費用から、帰国後の衣食住、佃の就職の世話まで〈父〉の庇護下に行われることに對する負債感もそれほど深刻ではない。

伸子は、〈母〉とは衝突し、〈夫〉とは訣別する。しかし、伸子の批判は佐々の〈家〉と〈父〉には向かないし、佐々の〈家〉と〈父〉を否定しない伸子が否定的に描かれもしない。女性である伸子には、アイデンティティを形成する際に、例えば志賀直哉が表現したような〈父〉との葛藤ではなく、〈母〉との葛藤がある。〈息子〉にとつての競争相手は〈父〉であるが、〈娘〉にとつての競争相手は

〈母〉であり、「仕事」と自立を目指す仲子にとって、「仕事」のできる有能な〈父〉は共感する存在なのだ。

また、仲子は、個の「得意な男の快活さでもなければ、雄々しさでもない」「陰翳」に、並の平凡な〈男〉ではないという「好奇心」(一章二)を抱き、近づく。しかし、仲子は男性的でない個を愛するのではない。仲子のプロポーズに対して「私は自分をすてても、あなたを完成させて上げたい」と応える個を見て、仲子は「彼が、初めて、男らしい権威を以て、自分の心持ちを明言してくれた歓喜」(二章五)に感激して涙する。そして、個との交際を深入りしないよう忠告に訪れた直子に、「愛は人間を変えろ」、「境遇や何かのために下積みになっていた方がいいものが、順当な光で育ちだす」(二章八)と反論する。仲子は、自分との結婚という「順当な光」によって、「下積みになっていた」個の「男らしい権威」が「育ちだす」ことを期待し、個と結婚するのだ。

高良留美子は、仲子という人物像の深層に、〈父王〉に庇護され、^{アトモ}「太母」の支配に苦しみ、自分をそこから連れ出してくれる〈王子〉を待ち望み、個と身分違いの結婚をする〈姫〉の存在を見出す^{註三}。確かに、仲子の深層には、身分の違いを乗り越えた自分の純粋な「愛」によって、呪いが解け、個が本来の姿である〈王子〉に戻るといふ物語を期待する点でも、〈姫〉の一面を見出せる。しかし、仲子は、まず〈父王〉によって〈太母〉の支配から連れ出され、そ

して、〈父王〉の役割を受け継いだ〈王子〉が〈父王〉の「男らしい権威」をも獲得することを期待するのだ。

後に個は仲子の嫌悪の対象となるが、それは、個が父性・男性性を回復し、その父性・男性性が嫌悪の理由になるのではなく、逆に、「順当な光」を浴びても、個の「男らしい権威」が、〈父〉のようには仲子を導き、庇護するほどには育たなかったからではないのか。仲子自身、「子供欲しくおありなさらぬか？」と個に問いかけ、「子供なんぞうるさくて仕様がありません」と答える個をこそ、「父」としては承認できない者」という理由で「嫌悪と不安」(四章九)を持って見る。そして別居を承諾しない個を「いつか一度でも、私が何うことに、淡泊に、男らしく、返答して下すったことがあつて？」(五章五)と責める。

さらに、個との結婚生活が破綻した後に、吉見素子という女性と親交を結ぶ仲子の姿も、一見「男性的」なものからの訣別のように見える。しかし、仲子は、「着物や帯、細々とした紐などがある趣味で遊び、身につけ」、「このような服装のできる、そして専門は露西亞文学の、独りで一軒の家の主人となって自由に暮らしている」(七章三)素子に魅かれるのであって、素子に注がれる仲子の視線は、服装から見取れる趣味の良さ、生活を楽しむゆとり、そしてゆとりを持ちながら「仕事」をこなす有能さといった点で、〈父〉に対するものと異ならない。つまり、〈男〉である〈父〉と個

に對する（女）である素子という男女の對立ではなく、有能な（父）と素子に對する無能な佃という才能の有無の對立を見出せる。以前（父）に見出し、そして佃に期待した有能さを、（女）の中にも発見するという点で、確かに変化はある。しかし、（男）に有能さと（男らしさ）を望むことが否定されるわけではない。

伸子は、自立を志向する女性であつて、（夫）に依存することによつて安定した生活を得ようとする、おとよさんのような一般的女性に對しては批判的であり（四章六）、（女）に關するそうしたジェンダーから自由である。しかし、その裏返しである、自らの才能で自分の道を切り開き、成功を勝ち取る有能さによつて（男）を評価する「男らしさ」の基準からは自由ではない。後に伸子は、「もし、あなたがそんな気の弱い、生存力の希薄な人なら、あんなに若いうちから苦勞して、自分の路はつけて来られなかつたらどうと思つてよ」（五章六）と佃に言う。アメリカで苦學していた佃に非凡な才能が埋もれていると伸子が思ったのも、この基準に基づいていたのであり、伸子は（父）の（男らしさ）が（夫）の中に再生産されることを期待するのだ。

二、恋愛イデオロギーと上昇をめぐる二重規範

ダルトン・マクドナルド

佃にとつて、伸子と（母）との葛藤は帰国するまで知りようのないことであろうが、伸子と（父）との關係は見て取れたはずであ

る。佃の目に映つた伸子は、社会的・經濟的に成功した（父）の娘である。佃は、世間知らずの若者でも、純粹無垢な聖者でもない。三十五歳の苦勞人である。その佃にとつて、伸子との結婚によつて「下積み」だつた自分に「順当な光」が当たることは、予想できることであろう。高良留美子が「かれに一貫しているのは（姫）（父）（母）（家）の一体化したものに（身を捧げる）ことによつて身を立てる道を見出したという願望である」と佃の「母權制的な（婿入り）願望」を指摘するように、伸子のプロポーズを承諾することは、佐々の（家）の恩恵を受け入れることでもある。

しかし、佃は、單なる打算だけの人物ではない。伸子から別居を切り出され、「私はすべてをすてて田舎へ引つ込みます」（五章五）と泣く佃に對して、「佃は、最初から愛なくて伸子を騙し、自分の社会的地位を作ろうとしたように云われた。彼としては、今、伸子と別居し、世間に家庭生活の破綻を示し、従つて自分に加えられた評言を事実で裏書するようなことは、全く苦痛であろう」、「ほんものの愛のあつたことを後からでも思い知らせてやりたい」（五章六）と思つているのだと伸子は解釈する。

伸子との結婚によつて恩恵を被る自分を正当化する「ほんものの愛」、世間知らずの良家の子女を騙して社会的地位を作ろうとする（男）という世間の冷評に對抗できる「ほんものの愛」、（家）同士の格式や（親）の社会的地位など問題ではなく、当人同士の「愛」

こそが重要だとする恋愛結婚イデオロギー、これこそ佃の信じ、「すべてをすてて」も実証しようとするものなのだ。

岩淵宏子は、佃子の渡米した第一次世界大戦終結前後のアメリカは、恋愛結婚イデオロギーが「すでに伝統的に根づいている社会」であり、そこで佃子が、恋愛結婚イデオロギーを受容し、「恋愛結婚に自由と開放の契機を見出しでもいた」と指摘する。しかし、「結婚を通じて創り出される家庭」が、資本主義社会の要請により、「家族個々人の社会的緊張を解消することによって、各々を活力に満たした社会構成メンバーとして再生産すること」と「子産み子育てによって、次の世代の労働力を再生産すること」を担うと述べた上で、第一に、佃子が子供を作らないことを結婚の条件としたこと、第二に、「内面的緊張関係をはらんだ夫との関係を通して、自己がより大きく豊かに変容する『自己成長の場』」、^{注四}「理想主義的な対関係実現の場」としての家庭を望んでいること、という二つの理由から、佃子を「制度としての恋愛結婚を越えうる内的契機」を持つていたと評価し、一方、「佃にとつて家庭とは、社会における緊張処理場」^{注五}なのであると佃を批判する。

岩淵の指摘するように、恋愛結婚イデオロギーは渡米生活の長い佃に強く根づいており、佃は一貫してこれにしがみつき、佐々の〈家〉の恩恵を受けつつ、「偽善者」のらく印を押す社会に反論できない状況、すなわち、「ほんものの愛」のある家庭を維持することに

固執する。アメリカという資本主義社会の中で苦学し、特に佃子との婚約以降、無能な「偽善者」だという「社会的緊張」にさらされ続けた佃は、安らかな家庭を保つために、ひたすら明確な自己主張を避け、佃子の意志に合わせることにだけに終始する。一方、佃子も恋愛結婚イデオロギーを受容していたと思われるが、帰国後、佃を「偽善者」だとして離婚する。では、佃子には「制度としての恋愛結婚を越えうる内的契機」があったのか。

佃子は、これまで〈父〉に庇護され、資本主義社会の「社会的緊張」にさらされてこなかった。〈母〉との葛藤という家庭内の「緊張」を糧として「成長」し、さらなる「成長」を目指す佃子は、岩淵の述べるように佃との家庭にも「緊張」を求め、佃の忍耐は報われるどころか逆効果にしかならない。しかし、佃子が労働力再生産の場を必要としないわけではない。

佃との家庭において芸術的意欲を減退させた佃子は、「東北の田舎」に出かけ、「力が漲ってくる洋々とした心持」（四章四）になり、そして、「佃とて木の根っこではない、いつかは少しずつでも変わるまいものでもない」と、希望を抱きなおし（四章十六）、「久しぶりで短い小説を」（四章七）書くことができる。佃子にとつての労働力再生産の場は「東北の田舎」なのだ。

したがって、岩淵の言う、夫との間に「内面的緊張関係」を求め、それを通しての「自己成長」を望むことが、「制度としての恋

「愛結婚を越えうる内的契機」となりうるとは思われない。この時の伸子は、「東北の田舎」に労働力再生産の機能を担わせることで、二人の「恋愛結婚」を維持して行こうとしているし、佃を愛していると思つたから結婚し、愛が冷め、佃に嫌悪感を感じるようになったから、佃の「愛」を「ほんもの」ではなく、策略であると思つたから離婚する伸子は、むしろ既成の恋愛結婚イデオロギーそのままである。そして何よりも、佃に伸子を「成長」させるほどの才能さえあれば、二人の「恋愛結婚」を、文字通り「理想主義的な対関係実現の場」として成就させてしまふからである。

伸子は、世間一般の結婚について、「普通、娘さんはお嫁に行つて落着いて、良人と同化して、最も現在の社会に安定な生活を得ようとするのが目的でしょう？ だから同じ階級、同じ伝統をもつた家、または少しか或は沢山、運命が許すだけ成り上がることを条件とする」(三章四)と認識している。伸子と佃の結婚は、こうした結婚とは逆である。「同化」を求められるのは佃の方であり、「安定な生活を得ようとする」のも、「成り上がる」のも佃である。

そして、世間は、**〈女〉**が独力で「成り上がることを」を要求しないかわりに、結婚によつて「成り上がることを」を許し、一方、**〈男〉**には自力で「成り上がることを」を要求し、結婚によつて「成り上がることを」を許さない。**〈男〉**が「成り上がる」ような結婚をすることは、それだけで、自力では「成り上がることを」できない無能な

〈男〉である証拠であり、**〈女〉**をだまして「成り上がる」「狡さ」の証明でもあるのだ。

ここには、明確なジェンダーによる**二重規範**がある。それは、女性の社会進出の進んだ自由の国アメリカでも、家長制度下の抑圧的な日本でも、変ることなく佃を追いつめる。「伸子の父の友人の子息」だと名乗る男は、伸子に「佃君は偽善者ですよ」と告げに来る(二章八)。また、伸子のアメリカにおける**〈母〉**とも言うべきミス・ブラットは、伸子が「私は佃さんを愛しています」と告げても動揺しないが、「私どもは婚約をいたしました」と告げると驚愕する。ミス・ブラットは、わざわざ佃も一緒に自宅に招き、伸子の前で佃に議論をしかけ、佃が無能な「偽善者」であることを証明して見せようとする(二章七)。そして、このミス・ブラットの言動とまったく同じことが、伸子の帰国後、多計代によつて繰り返される。この**二重規範**の圧力こそが、それに対抗できる唯一つのものとしての恋愛結婚イデオロギーに、佃を固執させるのだ。

一方、伸子は、ミス・ブラットに対した時には「彼の名が紳士録に載っていたら、誰がそんなことを云うだろう」(二章六)と考え、多計代に対した時にも、最初は「佃が貧しく、社会的背景も持たないため、多計代は一層、彼女の疑惑を深めるのだ」(三章四)と思う。しかし、この時点までは、佃の埋もれた才能を信じ、佃が正當に評価されないことに憤慨していた伸子が、やがて**〈母〉**との葛藤

の中でこの態度を保てなくなり、へ母へとともに佃を無能な「偽善者」とするようになるのだ。^{注六}

三、新しい母と娘——世代間の葛藤

山下悦子は、伸子が「母からの離脱」を求めて渡米したとしながらも、帰国後の伸子と多計代との関係を「家」を媒介に「したものと捉え、「家」の家長がまるで母であるかのように読者には思われる」として、「伸子」を「家」の母の権力から自立できなかつたわがまま娘の話である」と結論づける。^{注七}

しかし、伸子にとつての多計代は、へ父へに代つて家父長制を体現するへ母へであり、伸子が多計代から受けているのは、結婚するまではへ家へに閉じ込められ、やがて長女として婚養子を迎えてへ家へを継がなければならない、あるいは、長男にへ家へを継がせるために適当な時期に他のへ家へに嫁がせられる、というようなへ家への重圧なのだろうか。

佃への不信を言い立てる多計代に対して、伸子は「どつか母様の知っていらつしやる人の中で、私が愛してもいいとお思ひなさる人があること？ これまで私の囲りにあらわれた人と、一人でも自由に交渉させていいとお思ひになったことがあつて？ ないでしょう」と、「私の仕事とか成功とかについて、どんなに御自分が沢山の希望をかけていらつしやるか―それは考えて下さればわかるでしょ

う？ 母様は、ある点で御自分の生活ではできなかったことを、私にさせたいと思つていらつしやるのよ」と答える。そして「母様には、恋愛なんかから超越して、独り高く淨しというような、私を見ているのが趣味なようなところがある」と続ける伸子に対し、多計代は「何も独りである云やしません。いい人さえあれば、お前を啓発してくれる人がありさえすれば、いつだって私はよろこんで迎えますよ」（三章四）と反論する。

「お前を啓発してくれる人がありさえすれば」という多計代の言葉からは、むしろ伸子が指摘しているように「啓発してくれる人」に出会わないならば、「独り高く淨」くいるべきだというメッセージが見て取れてしまう。伸子にとつての多計代は、自らの「仕事とか成功」を望み、しかし自分には実現できなかった「仕事とか成功」をへ娘へに託し、へ女へを「仕事とか成功」に「啓発」することなど思いもよらないへ男へたちをへ娘へから遠ざけてきた、当時としては例外的な新しいへ母へであり、伸子が感じているのは、へ家への重圧などではなく、へ母への「ひそかな大望の偶像」にされそうだという重圧である。

伸子は、「仕事」を続けること、家事よりも「勉強」を優先すること、子供を産まないことを結婚の条件とする（二章五）。沼沢和子は、子供を産むことへの「本能的恐怖」について「母から娘へと伝えられる女の身と心に切実な感覚」と指摘しているが、^{注八}その他の

条件も、多計代から伸子に伝えられたことではないのか。

多計代は、佃を佐々の（家）の養子にすることを提案し、佃がそれをはっきりとは拒絶しなかったことを伸子の前に示す。多計代は、佃が、うわべは「愛」を口にしながら、有力な（家）と結びつくために（娘）と結婚するような無能な「偽善者」であることを証明しようとするのだ。しかし、伸子は、多計代が佃を「伸子ぐるみ、一層しつかり自分の手の下に結びつけてしまおう」としていると考え、「生存の根底を脅かされるような恐怖を」（三章十）覚え、（母）から受けるこの「恐怖」こそ、伸子を「父について紐育へ」行かせたものであり、伸子に佃を選ばせたものである。

伸子と多計代の関係については、「ある時は全き母であり、ある時は友達であり、ある時には競争者で」あり、「全力を要する生存の対照であった——自分と母との性格の差を自覚し、生活態度を批判し、一言に云えば、彼女の模型ではない一女性としての自分を造形して行くためには、伸子は、生半可の力を費したのではない」（三章十一）と総括される。

単なる保護と束縛という母—息子関係以上に融合的で自他未分化な母—娘関係は、あまりに強く結びついており、無理に断ち切ろうとすると、その苦痛に二人とも耐えられない。（母）への批判は、そのまま自分への批判としてはね返り、伸子は（母）から離脱したいと同時に、離脱したくないという両義的感情の中で容易に動きが

取れない。そこで、伸子は、まず（父）の庇護の下に（母）から離れ、そこで出会った佃に（母）との断ち切りがたい関係を自分に代って断ち切ってくれる役割を負わせたのだ。伸子は、（母）ならば激しく反対すると思われた佃との結婚によって、（母）との「性格の差」を明らかにし、（母）を「批判」し、象徴的な意味での（母殺し）を達成して、（母）の「模型ではない」アイデンティティを確立しようとした。伸子は、「その親達も母様達とそっくりだというような男には、ちっとも興味を感じない。それどころか不安よ」（三章四）と言うように、自分と近い社会階層の（男）と親しくなることに対してアイデンティティの「不安」を感じてしまうのである。つて、（母）が（父）によって得た「物質的な繁栄」や「精神的、排他的で、征服的で、あまり智的でない原始的生命」の「充実」（三章九）と異質であったから、佃は選ばれたのだ。そして、歩いて十分ほどの距離とは言え、（母）から距離を取って生活することが可能になる。

しかし、伸子と多計代は決して対立しているのではない。「仕事とか成功」は、伸子自身の望みでもある。伸子を芸術的・精神的に「啓発」し、多計代にはできなかった「成功」を伸子に成就させること、それは、伸子と多計代とが一致して伸子の結婚相手に望むことなのだ。そして、（母）も伸子も明確に意識してはいないが、（父）によって得られた「物質的な繁栄」よりも高次なものとしての、伸

子の芸術的「成功」は、(母)の願望をかなえる一方で、伸子を「競争者」としての(母)に勝たせ、(母)との両義的關係の解決につながるという言葉もできる。こうした深い期待において、伸子と多計代とは強く深く絡み合っている。問題は、佶がこの期待に応えらるるのかという点であり、この点に関して、二人は、最初は食い違い、そして一致する。

大学に職を得、家庭を築くという「順当な光」を浴びても、佶が伸子を「啓発」するほどの精神的・芸術的才能を發揮しないことを伸子はすぐに見取り、佶に対する恋愛感情は急速に冷める。伸子は、佶の「通俗的な、ベルシヤ文学概論」の「小著書」の原稿を見て「癩癩を破裂」させそうになり、「自分が見栄坊で偏狭なせいで、かような、いわば特殊な文学的感覚の欠乏を、これほど苦にやむのたろうか」(四章二)と自身に疑問を持つが、それは、無意識的な奥深い所の期待、内面化されたジェンダーに基づく期待を裏切られた伸子の失望感の大きさを表している。佶は「寝たいだけ伸子を眠らせ」、「日常の買物も自分で厭わずし」、「台所さえ」手伝い、プロポーズの時の「決して私は家政婦を求めているのではない」という言葉を実証して見せるが、これらのすべてよりも「芸術的雰囲気欠乏」の「苦しみ」(四章三)の方が伸子にとっては大きい。

しかし、当事者同士すら明確には意識しない母娘の葛藤を、他者である佶には理解しようもない。苦勞人の彼は、金銭に細かく、

小遣帳をつけ、多計代が絵の稽古を始めた時も、その絵具筆筒の値段だけを気にし(四章二)、近所の子供が庭木の葉をむしることに怒り(四章三)といった具合に、芸術的どころか、徹底的に世俗的に振る舞う。こうして佶は、自分では伸子の「仕事」を助けているつもりでも、伸子にとっては、(父)と同様に「物質的」で、しかも(父)より劣る、頼りがいのない(夫)になり、さらに伸子の芸術的野心にマイナス影響を及ぼす存在になってしまうのだ。

江種満子は、「伸子のように、女性が男性を自分に合わせる(従わせる)よう望むケースは、世の中のジェンダー構成に逆行している、生まれると同時に男性優位の既得権を恵与されて自己形成してきた男性にとっては、男性優位のジェンダーを組み替えることなど、まったく論外」であり、「この意味で佶は、当然のことながらしぶとい戦士」であると述べる^{註10}。しかし、佶にとっては、伸子の所属階層のハビトスに合わせることも、伸子の恵与されている豊かな既得権の恩恵に自らもあずかる道である。佶は、ひたすら伸子に合わせているのであり、ただ物質的に満たされることを当然として軽視し、それを超える精神性・芸術性を求めるほどには、合わせきれないだけなのだ。むしろ、男性優位のジェンダーを組み替えることが困難なのは、佶に伸子を「啓発する」才能を期待し、有能で頼りがいがあるという基準で(男)を評価する多計代と伸子の方なのだ、多計代が内面化し、伸子の内に再生産され、多計代と伸子が

佃に対して要求する（男）に関するジェンダーは、これまで多くのフェミニズム批評が問題にしてこなかったことである。

四、〈結婚制度からの開放と自立〉というテーマ

伸子が「東北の田舎」に行つた後で書いた小説が活字になり、その中に多計代に批判的な「二字の形容詞」があつたことで、多計代は伸子呼びつけ「伸子が佃との関係で彼女にかけた苦勞を思い知るべきだということや、伸子の芸術が、目に見えて墮落し始めたというようなことを攻撃」する。この時は、伸子が「不愉快になり、同情的な気分を失」い、「真心を打つものを受けられず」帰ると、六日後「是非佃と二人で来てくれ」と言ってくる。今度は多計代は、直接伸子を攻撃するのではなく、「佃さんに、暗々にでも唆かされて書いたとしか思われぬのさ」（四章七）と佃に責任転嫁して見せる。すると、伸子の感情は一人で呼ばれた時とは逆のものになる。

佃の考えを料す多計代に対して、佃が「私は、御承知の通り、このひとの書くものには、絶対の自由を認めておりますから」と答えるのを聞いて、伸子は「自分に有利な弁明なのに、なぜか、この寛大らしい返答から眞実を感じず、夫の狡さのようなものを感じ」、「何を書こうと、彼女の自由です—その自由を私は認めている。それ故、書いたものは飽くまで書いたもの。そこに、どんな苦しみや

涙があるうとも、それは、自分や互いの生活に全然かわりない彼女の書いたもの—ほう、何と胸に浸み透る、冷たい寛容さ！」という思いにかられる。

一方、多計代の言い出す勘当は、「これはなぜかちつとも実感に訴えて来ない。そして、「どうぞお体を大切に」と挨拶する佃に対して、「すべてが信じられず、わざとらしく、変に感じられ」、佃が「失礼しましうか」というのを聞いて、伸子は「佃のわざと低めた声や、いかにも自分のものというように彼女を見る眼つきが、何かうるさかつた」と感じ、「形の上では突き放されながら、却つて母の心持ちと相通じるような、倒錯した感情が生まれ」る。

この場面は、伸子が、佃に対して頼りなさだけでなく、「狡さ」も感じるという点で重要なターニング・ポイントである。これ以降の伸子は、佃がいくら伸子の「仕事」や自由を尊重し、伸子への献身的な「愛」を表明し続けても、と言うよりそうすればするほど、それらすべての言動を、自分を懐柔し、繋ぎ止めておくための偽善的なポーズ、策略だとして、離婚の理由にして行く。

まず、多計代が責任転嫁していることは見て取りやすい。これによつて、多計代は、伸子一人を呼びつけた時のように不完全燃焼ではなく、勘当の宣告まで持ち前の激情を爆発させつつ、伸子との決定的な断絶を回避することができる。悪いのは伸子ではなく、佃なのだから、佃さえ取り除けば、伸子と関係はただちに修復可能なの

だ。

問題は、多計代がおそらくは感情のはけ口を求めて無意識的に取ったであろうこの戦略に、伸子がやはり明確な意識を持たないまま共犯関係に陥ってしまうことである。勘当が「なぜかちつとも実感に訴えて来ない」のは、伸子が、無意識的に、本当に勘当されるのは伸子ではなく佃であり、佃さえ取り除けば関係が修復されるという多計代の訴えを受け取っているからではないのか。

「仕事」を何より大切にしてきた伸子にとっては、「二字の形容詞」に過ぎなくても、かけがえない表現のはずである。しかも、〈母〉に対する批判は、伸子にとつて自らの主体的なテーマであった。おそらく、伸子だけ呼びつけた時に、多計代が「佃に唆されて書いた」と責めたならば、伸子の「仕事」のオリジナリティーと主体性を否定するこの言葉に対して、伸子は、自分自身がそれを書いたのであり、自分が何を書こうと自由だと反論したのである。ところが、この日は佃がいて、伸子の言うべきことを代行する。この伸子自身の代行者佃に、伸子は、「狡さ」や「苦しみや涙」を理解しない「冷たい寛容さ」を感じるのだ。

先に、〈母〉から離脱したいと同時に、離脱したくないという両義的感情の中で動きが取れない伸子が、自分に代つて〈母〉との関係を断ち切ってくれる役割を佃に負わせることを述べた。この場面にも同様の心理が見て取れる。

〈母〉を批判する作品を書くことは、〈母〉から離脱したくない方の伸子から見れば、〈母〉に対する「冷たい」仕打ちにはかならない。伸子は、佃との結婚によって〈母〉から距離を取り、「冷たい」仕打ちを責める自身の感情を抑圧し、「苦しみや涙」に耐えてそれを行った。ところが、〈母〉は、伸子を責めず、佃に責任転嫁することで伸子を庇護し続けようとする。これは、〈母〉からの離脱を願う方の伸子からすれば拒絶しなければならないのだが、この時には、佃がこの役割を代行する。そこで、伸子は、〈母〉を批判し、拒絶するという自身の行為の冷たさを佃に投影し、〈母〉と「相通じる」方の伸子の感情を開放する。

そして、精神的・芸術的に伸子を「啓発」できない、頼りがいのない〈夫〉に対する不満に、開放されたこの感情が混じる。佃には、「苦しみや涙」の中から作品を生み出す芸術家の生活など理解できない。しかしせめて、〈母〉と同様に「愛」に基づいて、たとえ事実や論理に反していても「唆かして書かせた」と自分を庇護してくれさえすれば、「苦しみや涙」からも癒されるのだが、佃はそれをしてくれない。それをしてくれない佃は、無能なだけでなく、〈母〉と違って、自分を庇護してくれるだけの「ほんものの愛」がない「冷たい」男なのだ。「ほんものの愛」がないのに、自分と結婚した佃は、〈母〉をはじめ世間の誰もが言うように「偽善者」に違いない。この「偽善者」が、「いかにも自分のものというように」

自分を捉え、自分を愛してくれる〈母〉から奪い、自分を所有しようとするのだ。ここにおいて、伸子の佃に対する感じ方は、「偽善者」にだまされて〈娘〉が奪われるという〈母〉が感じているものに共感し、無能な「狡い」〈男〉というジェンダーに基づく基準に同化する。そして、伸子が佃を結婚相手とし、伸子が〈母〉を批判した作品を発表したことで呼びつけられ、勘当されるという、これまで書かれてきた事実が、〈母〉と伸子の内面では、佃のせいで伸子まで勘当されてしまったというように転倒する。

この場面が重要なターニング・ポイントであることのもう一つの意味は、この事件の後、伸子が、「自分でしゃんと立って行こうとする欲望と真面目に結びついた」気持ちになって次の「仕事」に着手し（四章八）、〈母〉からの開放と自立を志向する主体ではなく、〈妻〉を束縛し、所有する〈夫〉からの自由を、〈制度〉としての結婚からの開放と自立を、〈母〉をはじめとする女性一般と連帯して志向する主体へと切り替わり、「伸子」という作品のテーマも切り替わるといふ点である。

多計代は、〈父〉について「近頃は全くだいいい父様」だが、「若い頃の気むずかしかったことと云ったら」（四章二）と語っていた。〈母〉は、こうした結婚生活に耐え、〈娘〉に「仕事とか成功」の期待を託したのだ。伸子が、〈制度〉としての結婚からの開放と自立というテーマを追及し、佃と離婚し、自力での「成功」を目指すこ

とは、こうした〈母〉と連帯し、〈母〉の託したものを引き継ぐことであると同時に、〈娘〉に期待を託すしかなかった〈母〉を越える、次の世代としての伸子独自の、〈母〉のコピーではない人生でもある。〈制度〉としての結婚からの開放と自立というテーマを追及することによって、母―娘未分化の密着状態ではなく、女性同士の連帯というより良い関係を築く可能性が開けるのだ。

佃に非凡な才能が埋もれているという評価が誤っていたことを、すでに伸子は痛感している。〈母〉にできなかった「成功」を佃の「啓発」によって成し遂げ、〈母〉との両義的関係を解決するという可能性は閉ざされた。それに替わる可能性が、〈制度〉としての結婚からの開放と自立というテーマである。そして、佃に要請される役割も、「啓発」者から、「偽善者」へと変わる。

伸子は、「東北の田舎」に行つた時に、すでに、「ほんにおれなんぞお国風で、嫁ぐことはかり教えられ、字も書けないで、今になってからはあ口惜しいことよ」（四章五）という祖母の愚痴を聞き、「おとよさんが行先に不安を感じ、養老保険でもかけるように、結婚しようと思っているのがはげゆもあり、哀れでもあった」と、「女性の生活の様々な、しかし一様に思うようには行っていない標本を眺めているように」（四章六）感じている。しかし、この時点では、伸子の立場はまさに「標本を眺めているよう」でしかなく、主体的ではない。おとよさんが「佃さんがなんでもよくおわかりですか

ら、伸子さんはお仕合わせですわ」と言うように、「仕事を」した
いからと一人で旅行する伸子と世間一般の「妻」、それを認める佃
と世間一般の「夫」、アメリカでの伸子のプロポーズで始まった佃
との結婚と一般的な「制度としての結婚」とは、束縛と所有という
点において、事実上大きな差異がある。伸子は、当時としては例外
的に「仕事」や自立を最優先する「妻」であり、佃は、例外的に、
その「妻」に従う「夫」である。

しかし、この佃が「偽善者」であり、伸子の「仕事」や意志や自
由を尊重するのも、伸子を所有するための狡い策略なのだ、という
要素を加わえることによって、その差異は乗り越えられる。伸子
が、「自分でしゃんと立って行こうとする欲望と真面目に結びつい
た」気持ちになり、次の「仕事」に着手できるのは、佃を「偽善
者」とすることによって、自らも「夫」に束縛され、所有される
「妻」として、「制度としての結婚からの開放と自立」というテーマ
に主体として関わることが可能になり、「書く主体」としての伸子
がここで再生したことを意味している。

おわりに―「影」からの逃走と生贖の羊^{スケルトン}

〈父〉について渡米し、佃にプロポーズした時の伸子は、〈母〉か
ら自由になり、自分の意志で行動する主体であらうと志向し、この
志向に基づいた作品を「書く主体」であらうとしていた。それは、

自他未分化な母―娘の関係を自―他として区分し、〈母〉を他者と
して批判するという意味で、〈父〉の導きのもとに男性的な象徴言
語、象徴的な〈母殺し〉を志向することだったと言える。しかし、
この主体志向とは別に、伸子の深層と外界とを横断して、恋愛結婚
イデオロギーと、「仕事」ができる有能さによって〈男〉を評価し、
有能さを〈男〉に望むジェンダーとが存在していた。その後、伸子
も佃もこの二つの力に強く動かされて行く。

帰国後、予想通り佃は、母―娘の間に異物として挟まり、母―娘
の融合関係を断つが、「男らしい権威」と埋もれた才能を発揮する
という点では期待外れだったことがわかる。しかし、〈母〉は、〈母〉
からの自立を志向したことにしても、また、佃の才能を見誤って
いたことにしても、ジェンダーに基づいた「偽善者」佃のイメー
ジにすべての責任を転嫁し、母―娘の関係を修復しようとする。そ
して伸子も、〈母〉とともに、事実も論理も乗り越えて、自分自身
が主体的に行った佃との恋愛結婚の結果責任を「偽善者」佃に負わ
せ、〈母〉に結びつく。

〈母〉は〈娘〉に自立の実現を望み、その望みを託された〈娘〉
は〈母〉からの自立を志向する、伸子と多計代は、実際にこれらの
ことを行いながら、同時に心の深層では、〈男〉が家父長としての
権力をもって〈母〉の下から〈娘〉を奪い、所有するという古くか
らの物語を共感する。^{註三}そして、この非論理的・両義的感覚の中か

ら、当時としては例外的な実際の多計代・伸子・佃にはすでに当てはまらない部分があるにもかかわらず、〈妻〉を束縛し、所有する〈夫〉からの自由、〈制度〉としての結婚からの開放と自立」という一般的理念が屹立し、〈書く主体〉としての伸子が再生産される。

伸子は、主体であることを、男性的な象徴言語、象徴的な〈母殺し〉を志向しながら、同時に自らが志向する男性的言葉では捉えられない回路を通して〈母〉と結びつくという、非論理的で、曖昧で、両義的な存在なのだ。この点に関し、伸子は決して「男根的」ではなく、佃一〈男〉にとつてのまったくの他者なのだ。これまでも、多くの男性読者に反発と嫌悪を感じさせてきたのは、この点、特に伸子が主体を志向しながらその責任を負わないという点ではないのか。

一方、佃は、伸子が別居―離婚を提案しても、「初めっから幾度も云つてある通り、君は自由です」、「私が、こんなに真心をかけて愛しているのに苦しめるのは全く気の毒です」（五章五）と、伸子からのプロポーズを受けた時と同じ献身的な「ほんものの愛」を訴え続ける。この点に関するかぎり、佃は〈真実〉〈真理〉を一貫して訴える「統一的主体」である。

しかし、佃が愛情表現のつもりで口にするこれらの言葉は、「いじめて、いじめて、本音を吐くまで参らせられたら、どんなにすつとするだろう」（五章四）というように伸子を病的なまでに苛立た

せずにはおかない。〈真実〉〈真理〉を一貫して訴える佃の言葉は、〈母〉と連帯して、ここまでの経緯の責任を佃に転化した伸子の曖昧な心の深奥を刺激し、「偽善的」ポーズに隠れて〈妻〉を束縛し、所有する〈夫〉からの自由、〈制度〉としての結婚からの開放と自立」というテーマと、再生した〈書く主体〉としての伸子との基盤にある非論理性、曖昧さ、両義性を脅かし、突き動かす。佃は、伸子自身の否定したい側面、象徴的な意味での〈影〉なのだ。

「普通から見れば、伸子はすいぶん我がままな女房であった。彼を一人残して旅行に出た。寝坊であった。伸子には、そういう日常の些細な自由をさえ、妻となれば大特権のように貼紙つきで与えられるという云い難い憂鬱、夫が、それさえ与えておけば、不満を云うべきものもないように、他を省みない魂の孤独があった」（五章六）とあるように、伸子が苛立つのは、〈妻〉として自由が拘束されている時ではなく、むしろ、一般の〈妻〉とは違って例外的に自分が自由を許されている時である。伸子が〈書く主体〉であるためには、自由は見せかけでなくてはならず、佃の言葉は偽善でなければならぬのだ。そうでなければ、再生した〈書く主体〉としての伸子が解体してしまう。

「伸子」の歴史的意義は、新しい進歩的な〈母〉と〈娘〉の葛藤にある。伸子と多計代の関係が、未分化な母―娘密着状態から、よ

とか成功」への願望が、(へ娘)の中に変換され、実現される過程で生じる負の感情のはけ口とされた佃は、(へ娘)による象徴的な(へ母殺し)の代りの生贖の羊として捧げられたと言えるだろう。

* 「伸子」本文の引用は、『宮本百合子全集』(新日本出版社 79年)に拠った。

注一 「(作者の性)という制度」 「伸子」とフェミニズム批評への視点」

(東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学) 第45集 94年2月)

注二 「ジェンダーと主体」(中山和子・江種満子・藤森清編「ジェンダーの

日本近代文学」翰林書房 98年3月)

注三 「作者の性別とジェンダー批評」(Rim 8号 99年3月)

注四 「伸子」は「男根的」テキストかー千田洋幸批判」(Rim 9号 99年10月)

注五 「伸子」は男根的なテキストか?」(Rim 5号 96年5月)

注六 「研究動向 宮本百合子」(昭和文学研究) 37 98年9月) ならびに

「宮本百合子」(渡辺澄子編「女性文学を学ぶ人のために」世界思想社 00年10月)

注七 例えば、岩淵宏子「娘と母」 「伸子」のもうひとつのテキスト」(国

文目録) 第31号 91年11月)、および、北田幸恵「母と娘と「婿」の物語

ー「伸子」を読みなおす」(「社会文学」 第11号 97年6月)

注八 高橋昌子「志向と描写」 「伸子」の複合性について」(「日本文学」

94年4月) は、「伸子」を「女性解放という理念的志向と、明治大正文学

に優勢だった主観排除の外面描写とが作中で衝突している」作品とし、

「外面描写」の暗示する「伸子」の意に反する影の部分」をフェミニズム批

評は問題にしないと批判している。

注九 本多秋五編「宮本百合子研究」(新潮社 57年4月)

注一〇 寺沢みづほ訳(紀伊国屋書店 92年9月)

注一一 「母と娘と「婿」の物語ー「伸子」を読みなおす」(前出)

注一二 「物語として読む「伸子」」(「城西文学」 第22号 97年3月)

注一三 「伸子」は「男根的」テキストかー千田洋幸批判」(前出)

注一四 水田宗子「女としての失敗と成長ー宮本百合子とシルヴィア・プ

ラス」(ヒロインからヒーローへ) 田畑書店 82年12月)

注一五 「伸子」にみる開放のゆくえー仕事と愛と」(「昭和学院短期大学

紀要」 第23号 87年3月) 「宮本百合子」家族、政治、そしてフェミニ

ズム」翰林書房 96年10月)

注一六 高橋昌子「志向と描写」 「伸子」の複合性について」(前出) に

「佃が同席した場面で彼に研究の目的や人生の目的を問い詰めるミス・プ

ラットの個批判は、ずっと後に伸子が佃に向ける批判と同質のものであ

る」という、また、「この小説では一貫して伸子は母に反発しながら、

行為において母の見立てや予言を後追いつける形で動いてゆく」という指

摘がある。

注一七 「マザコン文学論」(新曜社 91年10月)

注一八 「伸子」のプロポーズ」(「女が読む日本近代文学」新曜社 92年3月)

注一九 北田幸恵「母と娘と「婿」の物語ー「伸子」を読みなおす」(前

出) に、「母が許容しない男性だからこそ、(へ母)不在の空間で、母娘領

域と生活階層圏からの脱出を賭けて佃に惹かれ結びついた」という指摘

がある。

注二〇 「伸子」論ーアイスタクシオン(卓越化)とジェンダーの交点」

(岩淵宏子・北田幸恵・沼沢和子編「宮本百合子の時空」翰林書房 01年

6月)

注二一 この場面について、岩淵宏子「母と娘ー「伸子」のもう一つのテク

スト―(前出)が、「仕事については譲れないという揺るがぬ信念を持つており、そこを足場に、母と夫を冷静に見つめた結果、母の『哀れ』さと夫の狡さが鮮明に見えてきたのである」と、また、水田宗子「作者の性別とジェンダー批評」(前出)が、「佃は伸子が書いてはいけないとは言わない。それどころか、彼女が作家になることが自分の喜びでもあると言うのだが、佃の率直さを欠いた言い回し(略)は、彼が裏表のある人物であることを示していて、伸子とともに読者は彼を信用しない」と、伸子の「倒錯した感情」に無条件に同化するのには、「結婚制度からの開放と自立」というテーマをへ替く主体」としての伸子を成立させるためには、佃が「偽善者」であるということが必要な条件であることを示しているとも言える。

注三一 北田幸恵「母と娘と『婿』の物語―『伸子』を読みなおす」(前出)に、「家父長制家族の成立が母と娘の関係を分断し、母は奪われた娘を探しつづけるという深層の母娘物語を多計代は現している」という指摘がある。

注三三 例えば、荒正人「伸子と真知子」(『市民文学論』青木書店 55年6月)には、「第三者の立場からみれば、伸子という女はどうして自分の責任を反省しないのであろうか、と不審である」と、また、山本健吉「民主主義文学の精神的支柱」(『昭和の女流文学』実業之日本社 59年12月)には、「責任はすべて相手に負わせ、自分は無傷のまま、たくましく見事に脱皮を遂げる」と、「責任」が問題にされている。

— えんどう・しんじ、広島県立大学助教授 —